

生きていた丙午（ひのえうま）

県統計課
広報資料係長 田 中 文 司

はじめに

本書の1966年1月号で、「統計と丙午」と題して、60年前の明治39年丙午の年におけるひのえうまの迷信が、出生率にどのように影響したか、当時の統計資料に基づき、その前後の年の出生数とを比較してみた結果相当減少を示していたことから、その原因として考えられることはやはり丙午の迷信ではないだろうかとし、結びとしてそれから60年後の科学時代に生きる若者達は、ひのえうまなどの迷信は科学的な新しい視野から判断して60年前のような数字が、統計のうえに表われないようにすると記したのであるが、

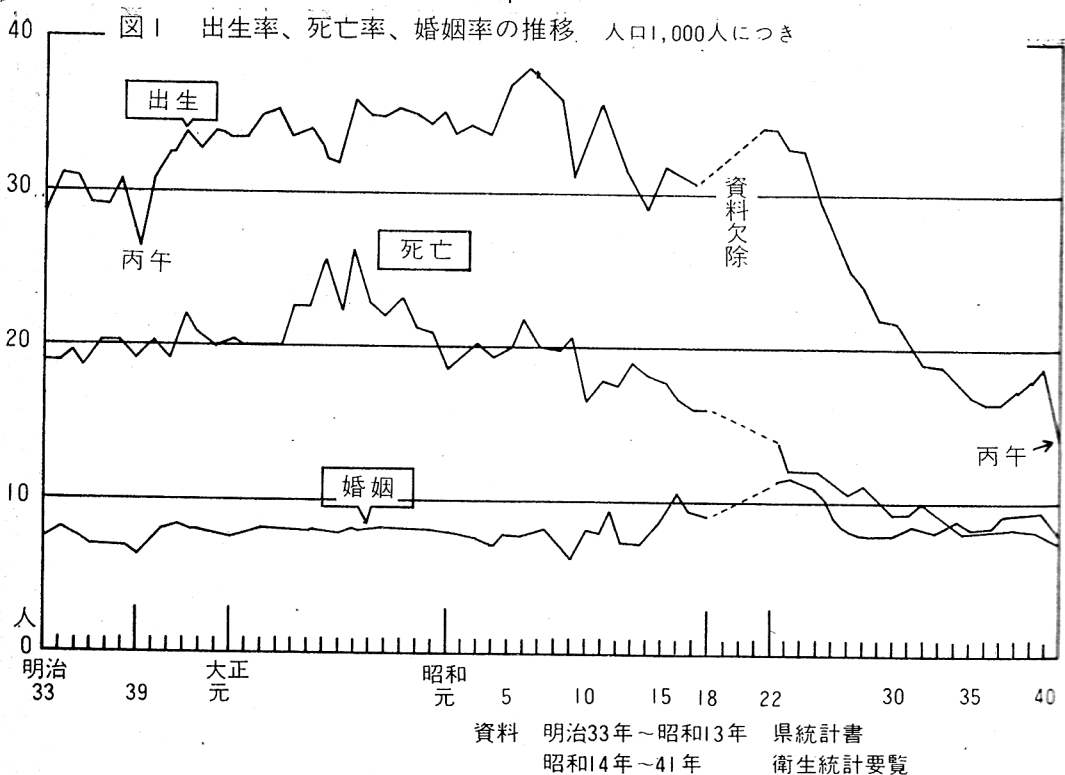
昭和41年の丙午の年は、60年の才月を経て、社会は科学の発達によりすべての面にいちじるしい変化をみせ、なお無限に高度化へ前進をつづけている。そして現代社会に生きる若者達の思想や生活が、教育を基にして60年前とは比べようもないほど進歩していると考えられるとき、何らの根拠もない古人の作り出した丙午の迷信が、一笑に付されてしまうのではないかと、彼等の行動などから判断して考えたわけである。そして人間生産の面にどのように反映し、どのような数字が、昭和41年の人口動態の出生の部に表われるだろうか楽しみをしていたのである。ところで、丙午は果して現代にも生きていたであろうか。私達の考えではそんな迷信なんかと軽く片付けてしまいが、どうして現代社会にも、ちよつと常識では考えられないような迷信に対する根強い信念が残っているようだ。人間が月世界を征服しようという科学の時代の出生数が史上最底という驚くべき数字を記録した

ことである。人口動態統計（県医業務課調）によつて、その実態にふれてみることにした。

出生率の推移

明治33年以降、昭和41年までの67年間の出生率（人口1,000人対）をみると図1のとおりとなる。

この図によると、明治38年までは30人前後の出生率であつたが、60年前の丙午の明治39年には25人と低下していることが、はつきりとわかる。この出生の減は、現在のように受胎調節とか中絶が行なわれていたとは考えられず、人間の生殖本能によつて生産は続けられていたことであろうし、そこで考えられることは届出のごまかしである。とくに女子の出生率が、低下しているのはこの表われであろう。明治39年が、男100人に対し女は86.2であるが、明治38年は98.4、明治40年は99.6となつている。平常の年だと95人前後と推定されるに対し38年、40年が異常に高く、39年が低くすぎることになる。また38年12月の113.5は異常に高く、40年の1月から5月にかけて100人以上となつていることからごまかし届出があつたのではないかと考えられる。丙午の翌年から出生率は増加の傾向をみせ大正8年の31人を除き、33人前後となり、大正9年から35人台となり、昭和7年の37.9人を最高に下降線を画き昭和9年30人強となり11年35人まで上昇、以下下降線をたどる。ここで残念なことは昭和18年から21年間の統計資料が欠除していることである。大戦末期から終戦後のどさくさでの間の出来事である。昭和22年戦後のベビーブームといわれたときの出生率は34.2人、これを最高にして計画出産時代に入り下降線を



示し昭和26年に30人台を割り、32年に10人の出生率を示し37年までは下降、38年から若干の上昇線を描きはじめ40年18.7人となった。さて問題の41年であるが、13.6人と驚くべき減少を示した。

人口の自然増加率の推移

出生一死亡の自然増加人口について図1により明治33年からの推移をみると、明治から大正にかけて出生率も高かったが、死亡率も高く差引き自然増加人口は低率を示していることがわかる。明治33年から丙午の年までは自然増加率は10人前後であつたが、明治39年丙午の年は出生25.3—死亡19.1で自然増加率は6.2人ときわめて低い数字を示している。その後は漸次上昇をたどり15人程度大正7年と大正9年の死亡率が高かつたのは流行性感冒とそれに伴う肺炎、気管支炎などの死亡が多かつたためと考えられる。それ以後は増加の傾向にあり、戦後は昭和22年の自然増加率20.2が史上最高を示し、漸次出生率の低下にともない少くなくなり昭和30年12.5人とな

りそれ以後は10人から9人台となり、昭和41年にいたつて出生率13.6—死亡7.7で5.9人となり、明治39年の10人を下廻る低率を示した。

結婚率の推移

結婚率（人口1,000人対）は、丙午の明治39年を過ぎ昭和にいたるまで7,8件であつたが、昭和16年をはじめ10件を越え、戦後昭和22年から25年までは10件台で、漸次少くなり明治、大正時代と同率を示し昭和37年から漸次上昇をみせ10件台に近づき昭和41年丙午の年にいたり多少減少を示している。しかし結婚数そのものはあまり丙午に大きな影響があるとは考えられない。

史上最底の出生数を記録

前述、図1にみるとおり出生率においても、13.6人と前年より5.1人減少を示した昭和41年の出生数は、表1のとおり27,991人で、前年より10,266人とはじめて1万人台の減少数を示し、明治33年以降3万人台の出生数をくずれ、前年にくらべ27%の減少を示した。このように

べき出生数の減少は、平年ならば考えらそないこと
 当然丙午のための現象ではないかと考えられる
 である。これを明治39年の出生数に比べてみると、
 出生数において3,185人(10.2%)、出生率においてマイ
 ナス11.7対前年比においてもマイナス11.8とすべての点

において大きな減少を示していることが注目される。と
 もに丙午の年であり60年後の現代、明治時代をはるかに
 下廻る出生数を示したことはまことに驚くべき現象で、
 ちよつと常識では考えられないような数字となつて表わ
 れたことである。

表1 丙午の年とその前後の年(10カ年)の出生数および婚姻数

種別	人口数 千人	出生数			婚姻数	種別	人口数 千人	出生数			婚姻数
		出生率 (人口 1,000対)	対前年比					出生率 (人口 1,000対)	対前年比		
明治33年	1,177	32,691	27.8	94.4	8,619	昭和32年	2,055	38,619	18.6	90.9	14,779
34	1,188	36,245	30.5	110.8	9,501	33	2,050	38,556	18.6	99.8	15,737
35	1,200	36,276	30.2	100.1	9,175	34	2,047	37,401	18.0	97.0	16,210
36	1,199	33,975	28.3	93.4	8,003	35	2,047	35,664	17.4	95.3	16,326
37	1,198	33,298	27.8	98.0	8,579	36	2,055	33,638	16.4	94.3	16,375
38	1,220	36,752	30.1	109.7	8,693	37	2,063	33,660	16.4	100.1	17,133
39	1,231	31,176	25.3	84.8	8,205	38	2,065	35,714	17.3	106.1	18,487
40	1,245	37,614	30.2	120.7	9,409	39	2,077	36,442	17.6	102.0	18,470
41	1,259	39,868	31.7	110.0	10,505	40	2,056	38,357	18.7	104.9	18,697
42	1,281	41,739	32.3	104.7	10,441	41	2,057	27,991	13.6	73.0	18,080

資料 茨城県統計書、県医薬務課

表1により過去10年間の出生数のうごきを見ると、出
 生数において、昭和32年から37年にかけて若干の減少を
 示してきたが、昭和38年からわずかに増加に転じ40年に
 あたり18.7と10年前と同等の率を示していることから考
 えても、普通の年ならば41年も引きつづき増加すること
 が考えられるわけであり、増加しないまでも同等あるい
 は若干の減少程度にとどまるのではないだろうか、とく
 ら減少する理由として考えられることもないのである。
 また、対前年比をみても昭和32年から33年には9.1ポ
 イント減少し、昭和37年まで減少をつづけている。

33年から増加し40年までに4.9ポイントの増加を示し

60年前の明治39年前後10年の出生のうごきを表1から
 みると33年が出生率27.8人、対前年比94.4%と大きな減
 少を示しているが、34年、35年に平常の年にもどり、36
 年、37年は減少、38年に若干の増加を示し平常の出生

をみせているが、39年には出生率25.3人、前年比84.8と
 大きな減少をみせ40年以降は順調に増加の傾向をたどつ
 ていることがわかる。

表2は、丙午の年の明治39年と昭和41年の月別の出生
 数を、前年対比で表わしたものである。この表によると
 丙午の年の月別の出生数が、あきらかにされ見たとおり
 であるが、ここで気をつくことは両者とも丙午前年の対
 前年比がいずれも100%を越えている(明治39年9月を
 除き)のに、丙午の年の各月の前年比が、いずれも大き
 く下廻っている。とくに昭和41年は各月とも明治39年
 にくらべて低率を示している。そして明治39年と昭和41年
 の月別の出生において変わつている点は、明治38年12月
 の出生数が133.1と大きな増加率を示していること、こ
 の表に表わされていないが、明治40年の1月(118.6)、
 2月(133.6)、3月(142.5)、4月(133.9)と平常にく
 らべて驚くべき高率を示していることである。ここで考

表2 丙午の年の月別出生数および対前年比較表

	総数	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
明治 37年	33,298	3,668	2,751	3,666	2,766	2,458	1,760	2,082	2,074	3,120	2,625	3,139	3,189
〃 38年	36,752	3,675	3,372	3,953	3,104	2,672	1,920	2,283	2,444	3,041	2,905	3,140	4,243
対前年比	110.4	100.2	122.6	107.8	112.2	108.7	109.0	109.7	117.8	97.5	110.7	100.0	133.1
〃 39年	31,176	3,341	2,721	3,078	2,305	2,426	1,762	2,047	2,202	2,806	2,823	3,130	2,835
対前年比	84.8	90.9	80.7	77.8	74.3	90.8	91.8	89.7	90.1	92.3	97.2	99.7	66.8
昭和 39年	36,442	3,806	3,331	3,431	3,172	2,902	2,570	2,723	2,813	2,730	2,858	2,912	3,194
〃 40年	38,357	3,887	3,439	3,561	3,313	2,939	2,750	2,854	3,022	3,205	3,245	2,981	3,250
対前年比	105.3	102.1	103.2	103.8	104.4	101.3	107.1	104.8	107.4	117.4	113.5	102.4	102.1
〃 41年	27,991	2,594	2,438	2,498	2,291	2,110	1,910	2,231	2,280	2,158	2,246	2,456	2,779
対前年比	73.0	66.7	70.9	70.1	69.2	71.8	69.5	78.2	75.4	67.2	69.2	82.4	85.2

資料 茨城県統計書、県医薬務課

えられことはこの当時は計画出産ということがなく、いわゆる届出のごまかしによる丙午から逃がれる方法が、とられていたものと考えられる。この年に生まれた子供を届出をはやくして12月に、遅くらせて翌年1月以降に届出られたと思われることである。これは女子についてであろう。ところが昭和41年の場合は前年12月の出生前年比が、102.1と平常の月の数字が示されており、42年の1月から4月の出生数も前回のようないことはないかと考えられる。もつとも、42年には丙午の反動で出生数は急増することが予想され、現に1月2月の出生は大きく増加しているから60年前とは状況が違っている。

前回の丙午は届出のごまかしが、相当にあつたのではないかとと思われるが、今回の場合は出生のごまかしというようことは届出方法が、戦後出生立会者である医師助産婦等の出生証明書が、出生届出に添付されることになつたために殆どなくなつたのではないだろうか、そこで減少の原因として考えられることは、文明時代の人間が、考え出した受胎調節による合理的な計画生産という方法がとられたのであろう。このほかにも妊娠中絶という方法もあろうし、こういう点から考えると明治39年のように特に女子が、大きな減少を示したということは考

えられないことになる。まだ人口動態による男女別の出生数が、明らかにされていないが、届出方法が変つたために前回のよう男女比が示されるとはみられないであろう。

現代の科学時代においてなぜ丙午がそんなに嫌われるのだろうか、昔のことを言うと「古いなあ」「時代の流れよ」と一笑に付し過去の郷愁をどんどん破壊していく現代人の考えの中で、きわめ非合理的な丙午の迷信が信じられていたとは驚くばかりである。この出生数の減少が丙午のせいではないと言い切れる要素は何も考えられないのであるから当然丙午は日本人の心の中に生きていたことになる。もし、これが、丙午のせいではないとなるとむしろ人口学上の大問題となりそうである。

統計に表われた出生数からのみで云々するのはどうだろうか、本当に人間生産能力のある現代の人達から丙午が真陰に考えられているかということは疑問ではなかろうか何か割りきれないものを感じる。私見て思われるが、なにも無理をして丙午といわれるこの年に、子供をつくらなくても自由にコントロール出来るのだから、もし女の子でも生まれたらと言つたような、いわば無気持から出生を翌年なりに見送るといつたような考えの人が多いのではあるまいか、人間が発明した子供を

につくり出せるという受胎調節、妊娠中絶といった技術的なものが人間本来の生殖本態を上廻つて、丙午といふ迷信に名を借りた計画出産時代のいたづらではないかと考えてみたい。

む す び

本県の場合前述のように丙午の年の出生数が減少したことは統計数字によつて証明されたが、この現象は、ひたすら本県だけではなく全国的な現象であることから丙午の影響は立証されるであろう。全国の出生数は130万人、約30%前年より減少しているそうである。

このような現象を、都市とか、農村といったように地域的にしてみると迷信に対する地域住民の考え方などがわかつて面白い統計ができそうであるが、残念なこととその資料がいまだ整理されていないので、これは後日こゆずることにしたい。

さて、丙午のもたらした出生数が、やがてこの子供達の上級入学期になると幸せなことに楽に高校へ進学出来るということで、深刻な入学難など考えられないところ

であるか、この反面昭和42年の出生数は丙午の年の反動で、近年にないベビーブームを現出することが予想されて戦後の出生率の中でも相当高くなるだろうといわれている。丙午を嫌つて出生を延期したお父さん、お母さんがやがて深刻な入学難のなげきを味わいそうなことはまことに皮肉なことであるまいか。

次回の丙午は、60年後に訪れる。この60年間は社会のすべてがどのように変わっていくか、ちよつと想像もつかないが、現在では考えられそうにもない高度な発展を予想され、人間の生活も大きく変つてくることだろう。その時代に果して丙午は存在するであろうか、そしてその年の出生が統計にどのような形で表われるであろうか楽しみに待つていたものであるが、生者必滅のことわりあと60年の生命は、寂しいことであるが保証されない。その当時まで丙午などの迷信が伝えられていれば、その当時の統計マンがそれらのことについて書いてくれるのではないかと信じている。

